「絵画の何か｜定義」2026年10月17日(土)ー2026年11月22日(日)
POOL SIDE GALLERYでは、入江早耶、城戸保、佐藤克久、鈴木淳夫による企画展「絵画の何か｜定義」を開催します。

「絵画とは何か」

この問いには、すでに幾度となく答えが示されてきたようにも思えますし、一方で、制作が続く限り、終わることなく問い直され続けるものでもあるように思います。

企画展「絵画の何か」は、佐藤克久によって2015年に始まり、2017年、2019年と継続して開催されてきた展覧会です。絵画を実践する作家たちが集い、それぞれの立場から「絵画とは何か」という根源的な問いに向き合ってきました。

その試みを引き継ぐかたちで開催される本展では、新たに「定義」という副題を掲げます。もちろん、本展で一つの定義を提示しようというわけではありません。むしろ、絵画の定義は一つではなく、作家の数だけ存在し、さらに一人の作家のなかでも制作を重ねるなかで絶えず更新されていくものだと考えます。

本展に参加する佐藤克久、入江早耶、城戸保、鈴木淳夫の4名も、それぞれ異なる方法で「絵画の何か」を探求し続けている作家だと言えるでしょう。

支持体や絵具、画中で扱うイメージ、制作プロセス、さらには絵画との向き合い方まで、その出発点から方法論まで大きく異なります。

本展が目指すのは、それらを一つの答えへと収束させることではありません。4人の作家が、それぞれの現在地における「絵画の定義」を持ち寄ることで、多様な実践の重なりと共振から、「絵画とは何か」という問いそのものをあらためて立ち上がらせることにあります。

＊本展を起点として、2027年度にはTEZUKAYAMA GALLERY（大阪）への巡回展も予定しています。

ステートメント

「絵画の何か」という言葉は、2015年にMinatomachi POTLUCK BUILDINGで佐藤克久氏が企画した展覧会とトークイベントのタイトルに由来します。

当時、そのチラシを手に取りながら、私は心の内で「私もまさに絵画の何かに取り組んでいる」と叫びつつ、会場に足を運ぶこともせず、アトリエで黙々と絵具を彫り続けていました。

この「絵画の何か」という響きには、今もなお抗いがたい魅力を感じています。それは、かつて開催された「絵画の庭」、「絵画の存りか」など、絵画をめぐる思索的な企画に参加することへの憧れが、今も強くあるからだと思います。

私が考える「絵画の何か」に取り組む作家たちが一堂に会したとき、そこにはどのような風景が立ち現れるのだろうかと思い、このタイトルを引き継がせていただきました。

鈴木淳夫

ーーー

作家プロフィール

入江早耶 | Saya Irie

1983年岡山県生まれ。広島県在住。
2009年広島市立大学大学院芸術学研究科博士前期課程修了。二次元のイメージを消しゴムで消し、そのカスを素材として立体作品へと変換する独自の手法を展開。掛け軸のなかに描かれた観音像を立体化した作品や、日用品と日常会話を素材に新たな神話として再構成した作品など、既存の図像に対する異化的なアプローチを通して、現代における「表象と物質」の関係を再考させる。ユーモアを交えつつ、視覚文化における記憶や信仰のあり方を問い直す実践を続けている。

城戸保 | Tamotsu Kido

1974年三重県生まれ。愛知県在住。
特異な視点と独自の写真技法で、日常に潜む無意味な状況や事物からユーモアと美をすくい上げ、写真と絵画を行きつ戻りつ、既存の「風景画」を更新させる活動を行う。

主な個展に「駐車空間 / 富士景 / 光画」(清須市はるひ美術館/2025)、「駐車空間 / 文字景 / 光画」(HAGIWARA PROJECTS/2024)、 「駐車空間 / 絵画建築 / 案山子」(HAGIWARA PROJECTS/2021)
主なグループ展に「瀬戸現代美術展2025」(尾張東地方卸売市場/2025)、長谷川繁　城戸保「ペイン天狗とホト愚裸夫」 See Saw Gallery + hibit/2024)など。

佐藤克久 | Katsuhisa Sato

1973年広島県生まれ。
1999年愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了。
「現在の社会、美術状況を知り、思想を含み、自分の立ち位置を理解し示す。そして感情が起動するような造形要素を取り入れ、作り手が真似したくなるよう簡単で根源的に、もしくは超絶技巧でめいかいに描かれた物。これらの知識を詰め込むのである。・・・けれど難しい事に、実はそれらすべてをすっかり忘れた時に出来るのである。このようにして描かれたものが傑作である。」この考えを軸に制作を展開している。

主な個展に、2026年「い-い え」（Yoshimi Arts、大阪）2025年「こりごりごり」（名古屋造形大学ギャラリー、愛知）2024年「空っぱ」（Maki Fine Arts、東京）2023年「あけっぴろげ」（See Saw gallery+hibit、愛知）。おもなグループ展に2026年「見える仕組み」（CLEAR GALLERY TOKYO、東京）2025年「豊田市美術館開館30周記念コレクション展　星と星座」（豊田市美術

館、愛知）2024年「穴あきの風景」（MtK ContemporaryArt、京都)2023年「コレクション展「小さきものー宇宙／猫」」（豊田市美術館、愛知）2019年「豊田市美術館 リニューアルオープン記念 コレクション展　世界を開くのは誰だ？」（豊田市美術館、愛知）2019年「愛知県美術館リニューアル・オープン記念　全館コレクション企画　アイチアートクロニクル1919-2019」など。パブリックコレクション国立国際美術館、豊田市美術館。

鈴木淳夫 | Atsuo Suzuki

1977年愛知県生まれ。愛知県豊橋市在住。
静岡大学大学院教育学研究科修了。自身の作品を「彫る絵画(Carved Painting)」と称し、幾重にもパネルの上に塗り重ねた絵具の層を彫刻刀で彫り出し、様々な図柄を描く作風で制作を重ねてきました。この作業自体が、鈴木の身体の動きと時間の積み重ねを反映しています。塗ること、彫ること、それぞれの手のひらの動き、力の加減、どこまで彫るかという判断の一つひとつが、時間の経過とともに身体に負荷を与え、同時に作品に刻み込まれていきます。このプロセスは、物理的な重層性（絵具の層、彫刻刀で彫られた層）に加え、作家の精神的な重層性と見事に融合しています。絵具を「塗る」「重ねる」「彫る」「消す」といった行為の背後には、時間と身体が影響を与え、作家自身の思索や感情、さらには制作過程が反映されています。この重層的な作業の結果として生み出された作品は、鑑賞者にとって単なる視覚的な存在にとどまらず、作家の時間の蓄積、色彩の思考、身体の使い方、そしてその過程までもが「語られている」かのように感じさせる。

主な個展に「色の何か」（AIN SOPH DISPATCH/2026)「carving」(ギャラリー麟/2025)「絵画の証 - 彫る絵画-」(TEZUKAYAMA GALLERY/2025)「彫る　絵画」(ギャラリーサンセリテ/2024)。主なグループ展、アートフェアに「ART OSAKA 2026 Expanded」（クリエイティブセンター大阪/2026)「VOICES2025」(華山1914文化創意園区/2025)「鈴木と鈴木 ほるとほる」(桜ヶ丘ミュージアム/2022)など。

開催概要

名称 : 「絵画の何か｜定義」
会期 : 2026年10月17日 (土) – 11月22日 (日)
会場 : POOL SIDE GALLERY（ 〒920-0962 石川県金沢市広坂１丁目２–３２ 2F）
時間 : 12:00 – 18:00
休廊 : 月、火、水、木

主催：POOL SIDE GALLERY
企画：鈴木淳夫／岡田慎平
協力：東京画廊＋BTAP, Tokyo／HAGIWARA PROJECTS, Tokyo／Maki Fine Arts, Tokyo／Yoshimi Arts, Osaka／TEZUKAYAMA GALERY, Osaka
KVデザイン：塩谷啓悟